東アフリカの特別支援学級での実践～環境条件に応じた支援を探して～

阪本真樹子
（平成 20 年度 1 次隊 養護 ケニア）

はじめまして、阪本真樹子と申します。20 年度一次隊としてケニアモンバサというところに派遣されていました。今日はそこの特別支援学級での取り組み、活動を紹介させていただきます。宜しくお願いします。

それでは今日なんですけれども、今日は発表概要ということでケニアの紹介、それから特別支援教育の紹介、私の配属先であるセントピーターズロック校の紹介、そして私の苦闘ぶりを見ていただいて、最後に振り返りたいと思います。

ただ、せっかくなのでケニアを紹介する前にケニアの言語というとスワヒリ語という言語ということになります。お決まりなんですけれども、せっかくなので挨拶だけは皆さんとスワヒリ語でできたらなと思っています。日本でだとなかなかこう声が小さくなったり、それかれケニアでは握手もたくさんするんですけど、握手もちょっと照れ臭いなという思いがあると思うんですけれども、そこは是非元気に一緒に声を出していただけるとありがたいなと思います。ケニアでこう何か元気のない挨拶を返していると「真樹子どうしたんだ、体調が悪いのか、おなかが痛いのか、怒ってるのか」とよく言われていて、なので皆さんも是非大きな声で挨拶してください。今日は一つだけ、皆さん「ジャンボ」というのはよく聞くと思うんですけれども、私が皆さんに問いかけるときは「ハムジャンボ」というので、「ハトゥジャンボ」と返して下さい。じゃあちょっと練習してみます。「ハムジャンボ！」ありがとうございます。そしてもう一つ、もう一つは ”How are you?” と “I’m fine”. に相当するもので、あのこの集団の場では私が「ハバリゼン」と言うので、「ズリ」という風に答えてください。じゃあハムジャンボから行きます。「ハムジャンボ」「ハバリゼン」ありがとうございます、アサンテサーナ。

それでは私の発表を始めさせていただきます。ケニアですが、皆さんケニアがどこにあるかご存知でしょうか。ケニアはアフリカ大陸の中の一つの国です。ケニアの中のじゃあどこに位置するのか、アフリカっていうと日本人にとって全部同じような、同じようなっていったら失礼ですけど、なんかアフリカっていうと暑いところでっていう、一つ一つの国のイメージがなかなか持ちにくいんですけれども、ケニアは東アフリカに位置していて、あの紫がけの色のところがケニアなんですけれども、海も山もある国になっています。

ケニアというのはイギリスから独立した国で、東アフリカの経済の中心として、発展を遂げてきました。ナイロビという首都は、皆さん名前は聞いたことがあると思うんですけ

れども、東アフリカの中でもとても大きくて、高層ビルが建ち並ぶような都会です。一方でこれはマサイ族という有名な一族のお家なんですけれども、こういう土壁でそのまま暮らしているような色んな部族の暮らしが大切に護られ、混じり合いながら作られた国でもあります。部族は、全部で 47 部族ありまして、すべて違う言語をもっています。ものによっては文法も全然違いますので、家で話す言葉と学校で習う言葉が違うとか、皆さん学校で習う言葉が英語で公用語はスワヒリ語なんですね。なので、最低 2 ヶ国語以上はまぁみんな話せて、基本 3 ヶ国語話せる、3 ヶ国語というか 3 つの言葉を話せるというのがよくあるパターンではありました。

ここはちょっとだけレジュメにない資料を加えさせてもらって、せっかくなので食べ物の紹介、えっと奥にあります白い塊のようなものがウガリといって、トウモロコシ粉で作った主食になります。これが一番一般的で、どこでも皆さん作っている、中華マンの外側をもうちょっとねっちょりしたようなパサパサしたみたいな、何ていうか微妙なんですけどそれだけを固めたような食感のものです。それと手前にあるのはよくアジアでも食べられているチャパティもありますし、コースト、特にその海岸地区の方ではお米もたくさん食べます。一緒に合わせるものは色んな野菜だとかキャベツもあるんですけど、キャベツとかフクマオキというケーブの一種のものを炒めたようなものをよく食べたりします。

ケニアといえば皆さんよく思い浮かべるのは動物王国だと思うんですけども、やっぱり動物王国は動物王国でした。ただ、道端にいるわけではないので、国立公園に行くと日本では見られない動物たちに出会えます。立場を利用させていただいて、遊びにも行きました。

さて、いいところも沢山ある国なんですけれども、すごく難しい問題もみんなで抱えています。ここにあるのはナイロビのショッピングモールのようなところにあるお店で、とても綺麗で日本にもありそうなお店がある一方で、キレラと呼ばれたり、色んな名前のスラム街と呼ばれるところが共にある国でした。その貧富の差は想像を絶するもので、日本では想像できないようなものがありました。

例えば、まぁまぁいい職と言われているものに銀行員があるんですけれども、銀行員の収入が 5-6 万シルで、大体日本にして 8 万円でしょうか。っていうのに対して、私の学校で働いていた寮母さんの収入は 2,500 シル、大体 3,000 円くらいでした、月に。それの中から仕送りもして、部屋代も払って、さらに彼女たちはシングルマザーだったのでその中で暮らしているという現状があってそれでもそのスラム街に住む人々よりも収入がある方で、そうでした。

さて、では私の暮らしたモンバサという土地をちょっとご紹介します。先ほどケニアの中には山の部分と海の部分があるといったんですが、私が住んでいたのは海の近くです。アフリカというと赤道に沿っているので暑いイメージがあるんですけども、首都ナイロビ

は夏の軽井沢と呼ばれています、別名。乾燥していて、とても涼しい都市なんですね。なので、雨季になるとちょっとジャケットとかフリースを着こんで朝晩は息が白くなるようなところです。

一方で私が住んだ海岸沿いっていうのは一年中暑くて、ヤシの木もいっぱいあって、雨季にはずっとムシムシして暑いところでした。ちなみにこの写真は海岸側の、リゾート地なんですけれども、モンバサはヨーロッパのリゾート地で、でもそこのリゾート地の一角にもそんなタイヤ浮き輪がいっぱいありました。これ、大人気です。ケニア人、あんまり泳げる方がいないので、これをタイヤ貸しの人にお金を払って借りて浅瀬の遠くまで続くような海なんですけれども、そこにこのタイヤの浮き輪を持って遊ぶのがすごく、海をあんまり見たことがない人たちにとっては、とてつもない楽しみなようです。

先ほどいったケニアのこの真ん中の方にあるのがナイロビ、首都で、その一方インド洋に接しているところにあるのがモンバサ、私が暮らした場所になります。海がきれいな場所で、色とりどりの魚が見られます。そんなリゾート地なんですけれども、一方そのリゾート地の隣にはもちろん庶民の暮らしがあります。これは私が仲良くしていた、リリアという八百屋さんなんですけれども、例えばナスもあるしキャベツもあるしホウレンソウもありました。トマトはみんな大好きで、よく色んなものに入っています。マンゴーもあって、マンゴーは 30 円くらいで買えます。季節にもちろんよるんですけれども、マンゴとかはすごく手に入りやすい土地でした。近所の人にとても優しくしてもらって、リリアは毎日の仕事の帰り、立ち寄っては話しこんで色んなケニアの事情を教えてくれる、そんな仲良くなったケニア人の女の子でした。

さて、ここからはケニアの特別支援の教育制度、特別支援について簡単に一つご説明します。一つは教育制度全体なんですけれども、アフリカっていうとやっぱりすごく貧困の問題が大きくて、教育制度とかまだまだ難しいのではないかと思われる方も沢山いらっしゃると思います。私もそう思っていましたし、そういう面があるのも確かなんですけれども、一方ケニアでは一年から八年生のプライマリーという小学校段階にあたるようなものが国の無償化が進んでいます。昨年度セカンダリーの無償化が謳われました。

まだまだ難しくて、プライマリーでは爆発的な増加を経て就学率が随分上がったんですけれども、一年のときは結局就学用意をしていた 10 歳とか 12 歳の子が入ったために、一時期 105%とか一緒になった年があったりするほど一度爆発的な増加を経たんですけれども、教科書代がやっぱり払えないだとか人出が取られるっていう理由だったり、いろんな理由からその学校を続けることが難しいという皆さんや、今回セカンダリーの方が無償化の対象になろうとしているんですけれども、ケニアではみんな寄宿舎にセカンダリーでは入るんですね。その寄宿代が、べらぼうに高いので、そこですごく成績が優秀な子でも経済の理由からストップになってしまうということもまだ多々あるのはあります。

また、ケニア共通テストがありまして、八年生の時と三年生の時にあるそのテストの結

果で進学できる学校を許可制みたいな形で通知されるんですね。A~C のどれかにあなたは行くことができます、その中でお金を払える場所とかいろんな条件を加味して、自分が進学できるところを選ぶっていうような形になっています。先ほど言った貧富の差がとても大きくて、富裕層、富める者はより富んで貧しい者は永遠と貧しくて、っていう印象を本人ケニア人自身も持っているので、貧困のループから抜け出すためには学歴をつけることだ、優秀な成績を収めることがそこから抜け出す唯一の道だっていう風に思ってる方もたくさんいて、実際それ以外の人は難しいところがあるのがケニアなんです。

では特別支援分野ではどうかっていうと、特に農村部で強いんですけれども、障害者は隠すべき存在という意識がとてもまだ強く残っています。ただ、聴覚障害の方と身体障害の方に対しては他の障害の種別に比べると理解はあって、マラリアですとか交通事故、ポリオなどの後遺症で身近にたくさんいたっていう理由があるかもしれませんし、他の歴史的な背景もあったんじゃないかといわれています。

例えばこれはある外国人の方がやっている施設の様子なんですけれども、左側にある写真の方は一名の方が聴覚にハンデを持っている方で、右側に位置しているのはこの地方で、ケニアでよく使われている一般のタイプの車いすになります。下半身のみの歩行が難しくて、手は自由に動かせたりという方が多くいらっしゃるので、車いすを操作して色んなところに行かれたりお仕事をされている方もたくさんいます。

その他全体を見回しますと、公立・私立の特別支援学校と学級があります。ただ、とても数が限られたものであるのは確かです。また、全体の認知度がとても低く、彼らの生活の質を保つという事をとても難しい状態にあります。また先ほども言ったように、学歴という事が重視されることと、学費がすごくかかること、それから数が少なくて遠くのところまでは送り届けられないなどの理由から未就学のケースは本当に多くあります。

さて、ここで私の入りました St. Peter's the Rock 校という配属先の紹介をさせていただきます。St. Peter's は三つの部門をもつ小さな私立学校でした。全体の生徒数は 80 名ほどで、うち 30 名ほどが何らかのハンディキャップをもっています。

私が入ったのは特別支援クラスと書いてある Special Unit と呼ばれるところなんですが、他のクラスや他の課程の中にもハンデをもった子たちが一緒に在籍していました。Special Unit の方では、当時は 18 名から 24 名という大所帯でした。年齢も 6 歳から 23 歳と幅広く、日本では最初に思ったのは日本で信じられない幅が同じクラスにいるなということでした。主障害はダウン症、自閉症、てんかん、知的障害、脳性まひ、猫泣き症候群などで、クラスの教員は 1 名から 3 名、ただ定期の教員は一名でした。

ボランティアの要請内容は、3 代目 JOCV として、1 代目の養護担任として活動しました。スペシャルユニットでの日常業務っていうのが基本となっていまして、まぁスタッフの指導技術の改善ということも挙がってはいたんですけれども、なかなか難しい現状もありま

した。

それではここで私のもがきということで少しご紹介したいんですけれども、正直にいうと迷う事がとても多くて、何も出来なかったなと思う事も多々ありました。6 月末に赴任してから、9 月、長期休みに入りましたので任地にはいたんですけれども、私の本格的な子どもたちとの対話が、関係が始まったのは 9 月からだったんですね。そこから毎日の中では上手くいかないっていう事がとても多くて、特にコミュニケーションっていうのもやっぱりもちろんなんですけれども、日本で想像していたできるかもしれないことっていうのはほぼ、ほとんどもう出来ないことの方が多くてどういう方にしたらいいんだろうっていうことをすごく悩む日々が一定の期間続いていました。

その中で、この三つを柱として立てていたんですけれども、特に一番上にあるここに応じた学習の促進、それは私が今行く前に感じたこととは違うけれど、そこはどういう形でやるにしても、そのどんなように精選するか、どうアレンジできるかということがとても大事であるけれど、ただ私の柱として大事にしたいことは、そこは譲れないっていうところにも強くして思いました。

抵抗を感じたのは本当にたくさんあったんですけれども。やっぱりアフリカ諸国でよく言われることなんですけれども、体罰を多用するようなやり方ですとか、あとはその 24 名っていう日本では一つのクラスに入ることがない、しかも生活年齢もそれだけ幅がある子が同じクラスにいる状態で一斉授業をやるんですよね。でもそんなの無理だと思っていて、すごく抵抗を感じていました。でもそれをやっぱりコミュニケーションの面ではなかなか伝えることが難しかったですし、特に私がコミュニケーションで一番悲しかったのは子どもたちが英語で学習しているんですけれども、英語でもやっぱり難しくて、スワヒリ語も難しくて、無発語の子ですと単語のレベルの子も沢山いるのでその子たちに何とかやり取りをしてこうってときにせっかく発してくれた一言を、日本だったら絶対拾うようなひと言を、何をいってるかわからなくて拾ってあげられないんですよね。それがすごい悔しくて、コミュニケーションもすごく嫌だったんですごくどうにかしたいと思ったものの一つでした。

後は人も激しく入れ替わりまして、例えば私が活動した 1 年 9 カ月の間に担任の先生が 3 名代わられているんですね。給料の問題とか色々あるんですけれども、3 名代代わられていて何を引き継いでいけるのか、それから基本としてる障害児教育っていう日本で知っているようなやっぱり支援教育の分野で持っていてほしいものとか、教諭の資格とかまだまだ沢山あるんですけれども、まだまだそれも一本的になっていませんでしたので相手にどこまで求められるか、私が伝えられるかっていうことにすごく悩みましたし、経験を長く積まれている支援校で長くやってきた方でも、ダウン症、自閉症っていう名前は知っているけれど、じゃあどんなことが違って、どんな条件で学びやすくて、どうしたらいいんだろうっていうことに関してはあまりご存じなかったですね。でもそれをご存じないけれども

沢山経験なさっているし私もそれを上手く伝えきれないっていうところですごくジレンマに陥るところもありました。

ただ、その中で私が思うことや気付いたことを全部は絶対にできませんし、それに、それがケニアでその人たちにとって必要とされていることではないこともあったんですね。今ここで必要な形、受け入れてもらえる形で私が大事だと思う、個々に応じた学習、その子に応じた形での学習を私なりに進めたいっていうのが私の柱になりました。そう思いながら、音楽、ものを使った具体的、具体物を使ったりですとか、前の先輩方から引き継いだものをなるべく個別に使えるような環境の整備ですとか、そういうこともさせていただきまして、子どもたちの動機付けを高めて学習を保てるようなそんな環境、そんな授業っていうのを探し続けている日々でした。

その中で最初にできたことは時間割の整理でした。これは先ほどいった一斉授業をどうにかしたいという思いが強くありましたので、その前の断続的に行われたグループ活動を時間割の中で必ずやるように調整していくことから始めました。その前にあった時間割は今回資料がなくて挙げられていないんですが、あったけれど活用されてないというかランダムにされていたものが多かったので、その時間、トイレタイム、ブレイクタイム、ランチタイムって書いてあるところは全校同じなんですね。そのあと他にもクラスの時間を私と先ほど 1〜3 名といったんですけれど、私がいることで常時 2 名はその人が入れ替わる瞬間でない限りはいることになっていましたので、何とかしてグループワークをするために行いました。

ここにある G（A, B, C）って書いてあるところがグループワークの時間になっていまして、A、B、C をグループ分けを同僚と一緒にさせていただきました。学力テストとかはないんですけれども、グループ A が言葉によるコミュニケーションの指示理解が比較的可能で、少し複雑なテーマも可能なグループ、グループ B の方が簡単なルールの指示や理解はできて、行動や音声の模倣が活発なグループという風に分けさせていただいて、手のマッチングやジェスチャーなどが有効なグループ。グループ C の方は言葉による理解が比較的難しくて、ルーティーンを作ったりですとか、そういうことが行動の指標となっているようなグループということを同僚と確認して 3 つのグループに分けました。

それがこの時間整理の手順なんですけれども、日常生活の指導だとか、グループ学習の必要性をたどたどしい中で何とか伝えられてそのあとグループを作り、それから週 2 回は設定することを前提として組み合わせたり、そのあとの調整を行ったりしました。

この他にやったことと言えば、色々試してみたりもしたけれども、最終的に描画によるスケジュールの掲示、それからサインの活用、歌選択時の絵の活用という風になっています。本当に書きなぐったような絵で恐縮なんですけれども、写真を使うのとかがとても難しくて、高価なものなのでボランティアだから出してくれるんでしょみたいなことにどうしてもなってしまうんですね。それで他の教材を作る時のも、じゃあその教材のもととなるものは誰が出してくれるのということになってしまって、ボランティアがある程度入っ

てくる団体だったので、あ、ボランティアだから買えるんだよねみたいにいわれてしまう事がとても嫌で、どうしたら子どもたちにいい形を私がいなくなった後もなるべく使ってもらったり、馴染みのある形にできるだろうかということがすごく私の中で悩みでした。

一つだけ、映像を紹介します。授業の中で歌選択をしている場面です。絵を三つだけ書きました。誰が選びますかと聞いています。これはクラスの朝の会のような時間の一つ中で歌を選んで一緒に歌を歌ったり選択したり、それからジェスチャーとかで表したりするような時間でした。その前は全て言葉で聞いていて、何選ぶ、何選ぶってみんなで前で聞くんですけれども、言葉で答えられない子は教員が好きそうだなと思うのを提示してうんといったらそれでやるという感じだったんですね。でも絵を描くと選べる子が随分いて、楽しみに自分で迷いながら選べていました。とてもごちゃごちゃした状態ではあるんですけれども、こんな感じでいつもの授業が行われていました。

その他最後の方は少し教材を出すことですとかシールを使うというのも、またボランティアがといわれることが最初は気になってしまって出せなかったんですけれども、図工の授業をちょっと工夫したり、あとはチャートを使うのがケニアの一般的な方法ですのでチャートを利用したり、色んなそのまま置いてあった以前のボランティアが使用していた楽器をみんなで使ったりですとか、ケニアでは幼稚園から絵を使って学習をするので、幼稚園で習うより前の段階をどうやって教えたらいいのかということに対してあまり経験をお持ちでなかったので、絵と絵を結ぶとかもあまりしなかったんですよね。それをノートの中でなるべき手書きなんですけどみんなで使うようにしていったりとか、そういう変化をさせていただきました。

その他発信をするということもとても大事だなと感じた時期でしたので、色んなことを模索させていただきました。以前の先輩方から続いていたニーズのあった職業訓練としてのビーズ製作がありまして、そちらの販売を以前の JICA オフィスは違う先輩方が手掛けてくださったものに便乗させていただいたりとか、前の先輩、前任の方が橋渡しをしておいてくれたピースボートの乗船者とのやり取りが成立したりということもありました。どれもなかなか限定的なもので私が帰った後もつながるということは、今のところビーズ販売に関しては難しかったんですけれども、ただ色んな場所につながることでケニアの特別支援教育を発信することがすごく意味があるという風に、小さな私一人では両パターンに一人だったんですね。それでは何もできないけれど、その中で次の一歩につながることができるんではないかというように考えて小さくですがやらせていただきました。本来でしたら一つ一つ反応とか変化をお伝えするべきところなんですけれども、ちょっと時間と資料の都合上割愛させていただきます。

ただ、子どもたちが変わってきてくれたこと、それを例えば校長が無発語の自閉症の男の子がトイレサインをいつも私に必ず伝えてくれるようになったんですけれども、それを見て「うわー、フランクリンがトイレっていったの」ってすごく喜んでくださって、そう

いうときですとか、あとは寮母さんたちがトイレ指導をするのに洗濯物が増えるのがすごく嫌がっていて、いつも少し怒鳴り合いのようなやり取りになってしまっていたんですけれども、「今日はうまくいったの、ジョー？」といったりしてそういうことに関しても話しかけてくれたり、生活、日常生活の指導、歯磨きなどの指導を本当は機会型がいいんですけれども機会利用型ができませんでしたので、授業でやらせていただいたときも、「あ、じゃあクラハにも教えてあげてよ、ちゃんと磨くのはどうやるか。あの子たち困ってるんだから」と寮母さんからお話しをいただいたりして、そんなことを共有できたことがとてもうれしかったなと思っています。子ども達の変化を共有できることで色んなことが促進されたりしました。

最後に今振り返ってみると、全体としてはやっぱり本当に人に支えられたケニア生活だったなと思っています。スペシャルユニット、先ほどのところの担任の一人として認められたと思えたことは色々私が先に前に出ることだとか、他の担任が変わってしまう事に問題があったんですけれども、そのこと自体は自分のエゴなんですけれども、まぁ幸せだなぁと思う事もありましたし、一方伝えることやつなげることの難しさもとても感じて帰ってきたのも事実でした。何よりも、子どもと築いた関係が一番の宝物だというふうに私は思っています。色んな方に支えられて、色んな方に協力していただいて 2 年間を終えることが出来ました。ありがとうございました。